慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ケネー経済表（原表）の疑義に就て：坂田太郎教授の ケネー経済表 の 訳者解説 を中心として
Sub Title	An essay in the explanation of the mechanism inherent in the "Zig-zag tableau" of François Quesnay concerning mainly the annotations of Prof. Taro Sakata as translator
Author	渡邊, 建
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1957
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.50, No.6 (1957. 6) ,p.524(80)- 540(96)
JaLC DOI	10.14991/001.19570601-0080
Abstract	
Notes	資料
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19570601-0080

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ケネー経済表（原表）の疑義に就て

——坂田太郎教授の『ケネー経済表』の「訳者解説」を中心として——

渡邊　建

一

経済学の揺籃期に、自他共に「エコノミスト」Les économistes と称した仏蘭西の学者達の小グループの人々は、彼等の師父としてのケネーFrançois Quesnay の「経済表の公式の天才的発明以来、該科学は精密科学 Science exacte となり、其の一切の問題は幾何学並びに代数学の問題と等しき厳正にして不可抗的証明を受くるに至った」(Œuvres., p. 442：邦訳『ケネー全集』第三巻二七三頁)もので、「この公式の発明は経済学の完成と見做され」(Œuvres., p. 155：邦訳『ケネー全集』第一巻二六八頁)得るもので、「外国の諸著述家の中、何人も今日迄道徳並びに政治の諸原則全体を知悉することなく、何人も亦、これを精密科学となすことがなかったのは真実である。この名誉は仏蘭西人に——吾々の師に——残し置かれたのである」(Œuvres., p. 716. note.)と主張している。しかしながらこの直接の弟子達のかかる宗派的の火のような讃辞はむしろ彼等の教義が全面的に拒否される機縁となるに至ったもので、ケネーは科学的経済学者としては今日に至るまでその値する以下のものしか受けておらずして、その経済表も経済学の古典の一つとして認められながらも難解で殆んど一般には理解されずして奇異の感を与えつつ尚人々を惹きつけているのであるとシュムペーター Joseph A. Schumpeter はその『経済分析の歴史』(History of Economic Analysis, 1954：邦訳東畑訳本第二巻四六四頁、四八二頁、五〇二頁参照)に述べている。エンゲルス Friedrich Engels のいわゆるこの「スフィンクスの謎」を解くには、現在に於て、その発明者ケネーが置かれた祖国仏蘭西の実情、著者自身の環境、及びその著作等を丹念に検討する以外に方法はない。その著作に就ても、その当時から、ケネーは「書くことの最も少なかったのはまさに彼である」(Manvillon "Physiokratische Briefe an den Herrn Professor Dohn, 1780") と考えられ、「而もその書くや殆んどいつも格言風で不分明であった」(Blanqui, "Histoire de l'Economie Politique en Europe, 1838") と伝えられ、「格言以外殆んど書かなかった」(Léon de Lavergne, "Les Économistes française du dix-huitième siècle, 1870") とさえ判断せられていたのである。デール Eugène Daire が一八四六年に更にオンケン August Oncken が一八八八年にケネーの著作集を刊行することによりて、これ等の誤解は一掃されたが、其の後にもケネーの著作として重要なる文献がバウエル Stephan Bauer やシェル Gustave Schelle によりて発見せられたのである。従って坂田太郎教授は「読まれることの少ないこの思想家及びその学派に対して」この其の後に公表された「論稿をも含む著作の周到な検討からはじめ直さなければならぬ」と考えられ、ケネー生誕二百五十年(昭和十九年)を期して、その訳業の刊行を企てられたのであるが、大戦のために漸く昭和二十五年六月に先ず『ケネー経済表以前の諸論稿』が出版されたのである(同書「訳者序文」参照)。

続いて坂田教授は経済表に関するケネーの著作の現在に於て知り得らるるすべてを邦訳することによりてその構想の時間的推移を示めさんと企図されたが、それはウレルス G. Weulersse の『ミラボオ文書』("Les Manuscrits économiques de François Quesnay et du marquis de Mirabeau aux Archives Nationales, Paris, 1910") を手がかりとして、巴里の文書保管所のブレバン所長 Charles Braibant の協力を得て「現在において可能なる最大限度に貫くこと」(「訳者序文」六頁)を得られ昭和三十一年三月にその『ケネー経済表』が刊行せられたのである。

尚経済表は「原作が名うての難物であり、それについての諸家の解釈が紛々たるありさまであり、而も事実諸家の解釈のすべてが原作の丹念の検討の上に立っているとは言えないふしがあるというよりも、最初から型にはまった解釈に安住し切っている場合が少くないと思われる」(「訳者序文」五頁)と考えらるる教授は経済表に関するケネーのすべての原作の検討の上に立って「一応精一杯のことをやって見たという気もち」で訳者の「解説」八九頁を添えられたのである。しかも尚、教授は「解説と言いながら経済表を一層分りにくいものにしたという点がありはしなかったかを惧れる」(「訳者序文」六頁)と述べられている。

先ず坂田教授は「従来の経済表の研究家は、殆んどが範式を対象とし、原表は敬遠するか、またはせいぜい二次的なものとしてとりあつかってきた。それゆえ原表それ自体の研究文献は至って乏しいのである」(「訳者解説」四九頁)が元来「ただ漫然と原表と範式とを比較して、そのどちらかの優位を語ったりすることは当らない。……原表こそは生理学者ケネーの構図として適わしい構成をもつのであり、それこそが tableau fondamental (原表)なのであり、範式は略表とともに、その説明図に過ぎない、或は範式はたかだか説明図としての略表を改良したものに他ならない」(「訳者解説」八五頁)と解せられて『農業哲学』の「略表から示唆をうけて」(「訳者

解説」四九頁）経済表第二版本の地主一戸平均の純所得六百リーヴルを諸支出の基本とする原表の解説を試みられたのである（「訳者解説」四八頁第一図、本稿第三図参照）。

第一、経済表（原表）と略表に就て（『農業哲学』経済表本稿第一図、同書略表、本稿第二図参照）、

㈠経済表（原表）のすべての支出過程の終りに於て、生産・不生産両階級内に夫々滞留する貨幣に就て

坂田教授は『農業哲学』の略表が経済表（原表）の生産・不生産両階級の相互的支出過程を総括した結果に於て、生産階級には「地主階級の所得の支出の半額」の一千リーヴルと「生産階級に対する不生産階級の還附の合計」としての一千リーヴルとの合計二千リーヴルがこの階級の「受け取る額」（坂田訳『ケネー経済表』五〇頁、一四二頁参照）として表示され、そのうち「不生産階級に対する生産階級の還附の合計」一千リーヴルを支出するから生産階級の手には貨幣一千リーヴルのみが滞留することとなる。また同様に、不生産階級には「地主階級の支出の半額」の一千リーヴルと「不生産階級に対する生産階級の還附の合計」としての一千リーヴルとの合計二千リーヴルがこの階級により「受け取る額」となるが、そのうち「生産階級に対する不生産階級の還附の合計」一千リーヴルを支出すれば、やはり不生産階級の手に貨幣一千リーヴル滞留したままとなることを注意せられる（「訳者解説」六〇頁、坂田訳『ケネー経済表』五〇頁「表に示された分配の結果の概要」の略表参照、但し生産・不生産両階級間の点線が脱落しているがそれは正誤表に訂正されている。巻末の Figure 11 本稿第二図、第三図、第四図参照）。

㈡原表の第一段階の生産階級の年投資と地主階級の所得との関係に就て

第一図

『農業哲学』の経済表の原表

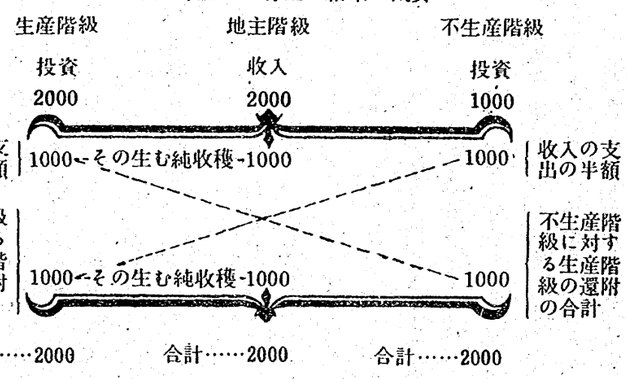
生産階級 年投資	地主階級 所得	不生産階級 年投資
2000	2000	1000
農産物	純収穫	製作品
1000	1000	1000
500	500	500
250	250	250
125	125	125
62－10	62－10	62－10
31－5	31－5	31－5
15－12－6	15－12－6	15－12－6
7－16－3	7－16－3	7－16－3
3－18－2	3－18－2	3－18－2
1－19－1	1－19－1	1－19－1
0－19－6	0－19－6	0－19－6
0－9－9	0－9－9	0－9－9
0－5－0	0－5－0	0－5－0
0－2－6	0－2－6	0－2－6
0－1－3	0－1－3	0－1－3
0－0－8	0－0－8	0－0－8
合計 2000	合計 2000	合計 2000

原表の第一段階の「生産階級の年投資……その生む純収益……地主階級の所得二千リーヴル」（岩波文庫『経済表』三頁、一七頁、三三頁参照）とあるを一応、生産階級が貨幣二千リーヴルを地主階級に納むる過程として考察すれば、それは「耕作者が借地農によりて耕作に使用された二千リーヴルの年投資をもって前年度に生ぜしめた純収穫の売却は地主に二千リーヴルの収入が支払われることとなる」（第二版『経済表の説明』pi.：邦訳岩波文庫一八頁、坂田訳本二五頁参照）と説明されている。しかしながら坂田教授は、斯く地主階級へ地代支払のために農産物二千リーヴルは一体誰れに売却せられ、それはまた「結局どうなるかが不明のままであることに」気づかれたのである（「訳者解説」四四頁）。この疑問は既に、増井幸雄博士の翻訳及び校閲せられた『経済表』を岩波文庫本として昭和八年刊行せられるに仲介の労を採られた小泉信三博士が執筆せられた一文の中に「若し地主への納付が売却代金で行はれるとすれば、その農産物は一体誰れに売られたか。「表」に現れた三階級以外に其買手がなければならぬといふ事にならう。甚だ不可解である。」（『学窓雑記』一七一頁、岩波文庫『経済表』「訳者序」一一頁参照）と述べ

第二図

『農業哲学』の経済表の略表

表に示された分配の結果の概要



総再生産額は生産階級に集り、この階級に支出される総額に等しい。その内訳を示せば

生産階級の投資……2000
直接生産階級の手に移る収入の部分……1000
生産階級に対する不生産階級の還附の合計……1000
生産階級からの原料品の購入に使われる不生産階級の投資……1000
合　計……5000

斯くて総再生産額は5000，その中耕作者がその投資として及びその原投資と年投資との利子として回収する分……3000
収入として残る分……2000
合　計……5000

表の中に含まれる富の総額

総再生産額……5000
収入の貨幣……2000
不生産階級の作業者がつねに保有するこの階級の投資……1000
合　計……8000

の農産物は一体誰れに売られたか。「表」に現れた三階級以外に其買手がなければならぬといふ事にならう。甚だ不可解である。」（『学窓雑記』一七一頁、岩波文庫『経済表』「訳者序」一一頁参照）と述べ

られているところである。

㈢生産・不生産両階級が夫々の階級内への支出と其の結果に就て

原表の基本的支出秩序に於ては、地主と同じく、生産階級の小作人も、不生産階級の工匠も、その支出の都度、その二分の一ずつをもって、農産物と製作品とを購入することとなるが、坂田教授はこの「農業者および、商工業者が、それぞれ階級内流通によって購入する一千リーヴルずつの農産物及び製作品は一体どこから来るか。この点を不問に付しておいたのでは、単純再生産の財貨的ヴォリュームは依然として不明のままに残される個所があること」(「訳者解説」四四頁)を注意せられる。

㈣不生産階級の年投資とその製作品に就て

原表の支出過程に在りては、不生産階級から地主階級に一千リーヴル、生産階級に一千リーヴル、合計二千リーヴルの製作品が売却せらるることとなるが、その代金の内一千リーヴルは、その原料とし、又その食料とする農産物の代金として生産階級に支出せらるるも、他の一千リーヴルは製作品購入のため、同じ不生産階級内に支出せられる。従って、次の年度に於て、本年度と同様に他の階級に売却せらるる製作品二千リーヴルは購入した農産物一千リーヴルと製作品一千リーヴルとによりて製作せらるることとなるのである。坂田教授は不生産階級の年投資とはこの製作品であるとし、不生産

階級内に滞留する貨幣の階級内流通によって、その年投資は製作品をもって補塡される経過を知ることができたと解せられ又「この階級の投資が他ならぬ製作品から成るいきさつを示されるのである」(「訳者解説」三六頁)と考えられたのである。

㈤生産・不生産両階級の年投資に就て

坂田教授は生産・不生産両階級の年投資は「一定の貨幣額をあらわすのか、それとも農産物ないし製作品を指すものなのか。このことは経済表の解釈にからまる最も厄介な問題の一つとされているのである」(「訳者解説」三七頁)が、原表の凡ゆる場合に於て、生産階級の年投資の下に農産物 productions、不生産階級の年投資の下に製作品等 ouvrages &c. と説明が記入されてあることよりして、生産階級の年投資は農産物であり、不生産階級のそれは製作品等であると解せられ「これ等を先ず財貨的性格においてつかむのがケネーの趣旨に添う所以ではないかと思う」(「訳者解説」三一頁)と考えられる。更に既述のごとく不生産階級の年投資が「他ならぬ製作品から成るいきさつを示めされ」この階級の年投資の下に「製作品等」という説明がしてあるのはまさしくこの事実を物語っていると考えてよさそうに思うと述べられている(「訳者解説」三六頁)。又生産階級の年投資に就ては第二版の『経済表の説明』に「(生産階級)の生産額は支出の秩序を余りに複雑ならしめないために、別個に考察されるところの租税・十分ノ一税及び農業者の投資の利子を除外して千二百リーヴルである」(ibid., p. iii: 岩波文庫本二一頁、坂田訳本二七頁)とし、地主・不生産両階級へその半分が売却せられ「最後に生産階級において、これを生じさせた人々によって消費される三百リーヴル分があり、さらに家畜の飼料と維持とのために用いられる三百リーヴル分がある。かようにして千二百リーヴルの生産額のうち、この(生産)階級は六百リーヴルを支出し、この六百リーヴルのその投資は云々」(ibid., p. iii-iv: 岩波文庫本二一頁、坂田訳本二七―二八頁)とあるが「この説明は生産階級の消費すべき六百リーヴル分の農産物がとりも直さず経費であり、経費であるがゆえに投資であることを示しているように思われる。表において、生産階級の年投資の下に「農産物」という説明のしてあることは上に触れたが、要するにわれわれは生産階級についても不生産階級についても、その年投資が表に財貨的形態で、現物形態で、打ち出されている点に注目しなくてはならないと思う」(「訳者解説」三八頁)とせられたのである。

二

第二、坂田教授の経済表(原表)の解説に就て(経済表第二版本原表、「訳者解説」四八頁、第一図、本稿第三図参照)

斯くて坂田教授の原表の解説にありては、第一段階として農業者(小作人)は前期間の総過程の終りに農産物二単位この場合に於ては六百リーヴルを生産・不生産両階級の他の成員に売却することによりて、両階級の成員の間に滞留していた貨幣を収得しえて、これを地主階級へ納付すると解することによりて、前記の第一の「生産・不生産両階級内に滞留する貨幣の問題」、第二の「生産階級の年投資と地主階級の所得との関連に就ての問題」、第三の「生産・不生産両階級の同一階級内への支出の問題」を一挙に解決せんとする独自の解釈を試みられたのである(「訳者解説」四六―四七頁参照)。

㈠坂田教授の「原表解説図」に就て

坂田教授の「原表解説図」にては

(1)原表そのままに「投資の利子」を別個に考察されるものとして農産物年々の再生産額は四単位 A・B・C・D 又は A′・B′・C′・D′ 経済表第二版の場合として教授は一単位三百リーヴルとして農産物の再生産額一千二百リーヴル、尚製作品一単位Eを加えて総再生産額五単位一千五百リーヴルとする(「訳者解説」四九頁)。『農業哲学』の原表や略表、『農業哲学綱要』の略式との関連においては一単位一千リーヴルとして農産物再生産額四千リーヴル、教授の如く製作品一単位を総生産額に加算すれば五千リーヴルとなる。この場合は投資の利子の回収を考慮しての農産物再生産額五単位五千リーヴルでなくして、製作品一単位一千リーヴルを加算しての再生産額五単位五千リーヴルであることに注意を要するものである。

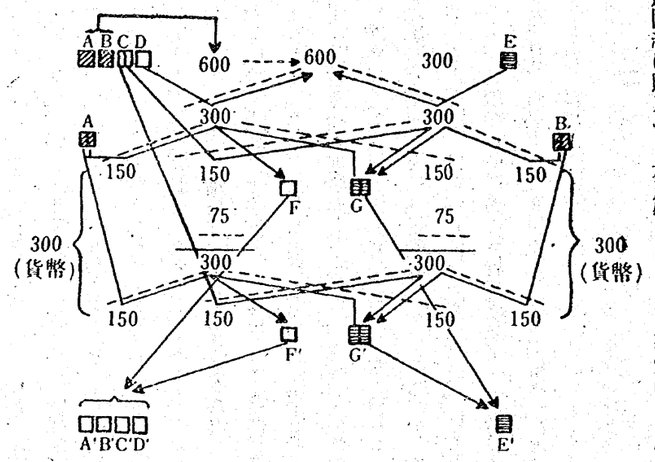
(2)生産階級は農産物一単位Aを生産階級内の他の成員に売却し

て、その代金としての貨幣一単位と、又農産物Bを不生産階級に売却して収得した貨幣一単位との合計二単位の貨幣を小作料として地主階級へ納付する。

(3)不生産階級は購入せる農産物Bによりて製作品Eを作るが、これは次の過程に於て地主階級に売却さるるものとする。

第三図

「坂田教授原表解説図」



(4)地主階級は生産階級より納付せられた貨幣二単位を支出して、農産物一単位Dと製作品一単位E（農産物Bの変形）を購入し、これ等を使用消費する。

(5)生産階級は地主階級に売却せる農産物Dの代金と不生産階級へ売却する農産物Cの代金との二単位の貨幣を支出して、農産物一単位Aと製作品一単位（GとG′）の半額とを購入し、これを生産資本——坂田教授の生産階級の年投資——F＋F′として農産物四単位A′・B′・C′・D′を再生産する。

(6)不生産階級は農産物一単位Cと製作品一単位（農産物Bの変形）とを購入して製作品二単位G、G′を作りて、その内の一単位を生産階級に売却し、その残額の一単位を年投資の補塡分E′とする。

(7)前記の支出過程によりて

$$A+\frac{1}{2}(G+G')=F+F' \longrightarrow A'B'C'D' \cdots\cdots\cdots\cdots (i)$$

$$G+G'=B+C \cdots\cdots\cdots\cdots (ii)$$

$$B=C \cdots\cdots\cdots\cdots (iii)$$

$$\frac{1}{2}(G+G')=B=C \cdots\cdots\cdots\cdots (iv)$$

$$A+C=F+F' \longrightarrow A'B'C'D' \cdots\cdots (i)\ \text{ト}\ (iv)\ \text{トヨリ}$$

$$E=B \quad \text{の変形}$$

$$D+E=D+B$$

故に農産物四単位　A・B・C・D　の内AとCとは年投資の回収分、DとBとは純収穫と考えられる（「訳者解説」四九頁参照）。

(二)坂田教授の解説に於ける再生産総額に就て

経済表第二版では原投資の利子が考慮せらるる時、これに当るものとして三百リーヴルが計上されているため、農産物再生産合計が一千五百リーヴルとなるが、もし六百リーヴルの投資がそれ自身を回収しながら百パーセントの六百リーヴルの純収穫を生み、さらにその他に三百リーヴルの原投資の利子の回収分を生産するならば正確に言って投資は二百五十パーセントの生産性を示すのでなくてはならない。ただし、教授は「原表においては、この三百リーヴルは原投資の利子としては表の計算の中に入っていないのである」（「訳者解説」三五頁）とせられ、しかも亦「われわれは他方商工業者の側において合計六百リーヴルの農産物の処理が行われるのを見る。すなわち三百リーヴルの農産物の加工と三百リーヴルの投資の補塡とである。」（「訳者解説」三五頁）と解せられる。教授は「この投資の補塡は階級内流通によって同業者から買入れられる製作品をもって補塡されるから、ここにわれわれはこの階級の投資が他ならぬ製作品から成るいきさつを示されるのである。」（「訳者解説」三六頁）とし、斯く「財貨的に考えればこの年投資は農業者から購入した三百リーヴルの農産物とともに処理せられて六百リーヴルの製作品の供給を可能にし、それは地主に対して三百リーヴルの製作品の、および農業者に対しての同額の製作品の、売却と対応することになる筈である。」（「訳者解説」三六頁）と考えられたのである。

『農業哲学』の略表の下の附記（本稿第二図参照）によれば総再生産額は生産階級に集り、この階級に支出される総額に等しい。その内訳を示せば

生産階級の年投資	
直接生産階級の手に移る所得の部分	二、〇〇〇
生産階級に対する不生産階級の還附の合計	一、〇〇〇
生産階級からの原料品の購入に使われる	一、〇〇〇
不生産階級の年投資	一、〇〇〇
合計	五、〇〇〇

斯く「不生産階級の投資は総生産額五千リーヴルの中に……含まれていた筈である。」（「訳者解説」六二頁）と考えらるるが、その次の「表の中に含まれる富の総額」の計算では

総再生産額	五、〇〇〇
収入の貨幣	二、〇〇〇
不生産階級の作業者がつねに保有する	

	一、〇〇〇
合計	八、〇〇〇

とあるがこの総生産額と別に計上された不生産階級の年投資一千リーヴルに就て教授も「実は貨幣形態のそれとでも考えるより他に仕方がない」（「訳者解説」六三頁）ものとせられたのである（坂田訳『ケネー経済表』五〇頁参照）。

三

第三、坂田教授の原表の解説を検討するに

㈠坂田教授は原表の第一段階として「生産階級の年投資と地主階級の所得との関係」を原表のジクザクの支出過程以外の生産・不生産両階級間の一支出過程として、それによりて表示された支出過程に於て生産・不生産両階級に夫々に滞留する貨幣一単位ずつの解決と、原表には現われていないが説明に述べられている両階級内の支出過程に関連あるものとして前述のごとき独自の解説を試みられたのである（「訳者解説」四六―四七頁）。

経済表に於てこの原表にのみ見られる生産階級の年投資と地主階級の所得とを点線にて結んでいることは、両階級の一つの支出過程と考えるべきでなくして、強いて言えば、生産階級から地主階級へ小作料や、租税・十分ノ一税が納められてその所得となる過程であって、財貨の移動のない貨幣のみの一方的流通と解すべきで、ボードーの解説以来一般にそのように解せられていたものである。筆者はむしろ、これは原表のジクザクの過程に於て、食料として地主・不生産両階級に売却される農産物二単位の代金が生産階級の年投資となり、その使用によりて原表の中央にその百パーセントの純収穫、二単位が再生産される過程即ち当該年度にジクザクの形に於て行われる過程と同様の過程が前年度にも行われて生産階級の「小作人が借地農作にて耕作に使用した六百リーヴルの年投資をもって前年度に生ぜしめた純収穫の売却は地主に六百リーヴルの所得の支払を与える。」（Tableau Œconomique, p. i: 邦訳岩波文庫本一八頁、坂田訳本二五頁）と説明されたものと考えられたのである。坂田教授の解説する如く生産・不生産両階級間の支出過程と考えるならば、それは当然経済表に表示せらるべきものであるのに、その過程は示めされず、従って原表にては血液たる貨幣が生産・不生産両階級の末端の成員の手に滞留したまま、その末端から静脈管を通じて心臓部の地位をあてがわれている地主階級へ還流するプロセスが全然表示されていないのである（「訳者解説」四六頁参照）。

それは原表が生産階級の純収穫の再生産過程を中心に考え、投資の利子を別に考察するとして生産さるる農産物を四単位にせることに基因するものと考えられる。農産物生産額を五単位とする略式又は範式に於て初めて不生産階級の投資が原料とする農産物を購入するために生産階級に支出さるる過程が描き加えられて貨幣の完全なる還流が考えられたのである。

㈡坂田教授は期間の当初において、不生産階級は原表にては商品形態をとる年投資として製作品一単位のみを所有し、範式にありては貨幣形態の投資以外なにものも所有しない（「訳者解説」七二頁）と解しいずれも一期間内に製作品が一単位ずつ二回製作せらるるものと、ビリモヴィッチや、ウーグ博士と同様に解釈せられるが、そのために農産物の購入、製作及びその製作品の売却による貨幣の循環の順序に無理が生じて「流通の順序としては不自然となるが」（「訳者解説」六九頁）と述べざるを得ないこととなったのである。筆者は期初に、生産階級が前年度に再生産した農産物五単位を所有するを前提とすると同様にマルクスの解説の如くに不生産階級にも他の階級に売却する製作品二単位を所有することとして流通の順序になんら矛盾を生ぜしめることなくして説明し得たのである（三田学会雑誌第三十八巻第三・四合併号、第八号掲載拙稿参照）。

㈢次に坂田教授の「原表解説図」（「訳者解説」四八頁第一図、本稿第三図）を検討するに、先ず

(1)前年度末に於て生産階級は農産物Aを生産階級に、農産物Bを不生産階級に売却するが、この過程はこの解説図には表示されていない。坂田教授は生産階級の農業者が斯く同一階級の他の成員に売却した農産物Aを地主・不生産両階級から支払われた代金の一半で再び購入するというのは「少し話がわざとらしく感じられるかも知れない」（「訳者解説」四七頁）と述べられているが、真に農産物Aは何んのために売却せられ、又何んのために再び買い戻されるのか理解し難い。この間に消費せられるとすれば同じ農産物が二回消費せられることとなる。

この前年度末に行われた過程はその解説図では、その売却代金が地主階級に納付せられる過程のみが表示されている。

(2)不生産階級は購入した農産物Bを製作品Eに転化し、これをその年投資とするとするが、尚それは地主階級に売却されるものとする。斯くてこの製作品E（農産物Bの転形）は「地主階級の手で最終的に消費されることは言うまでもない。」（「訳者解説」四七頁）と述べられている。これでは不生産階級の年投資として意義が認められないのである。

(3)次いで不生産階級は地主階級へ製作品E（農産物Bの転形）を売却せる代金の半額をもって農産物Cの半額を購入し、これと同じ階級内から購入する製作品（農産物Bの転形）の半額とをもって製作品Gをつくる。このGの半額を生産階級に売却した代金で農産物Cの半額を購入し、これと同じ階級内から購入する製作品（農産物Bの転形）の半額とを使用して製作品G′をつくる。このG′の半額は生産階級に売却される。

(4)この場合、農産物B′は製作品Eに転化して、不生産階級の年投資となるが、それは地主階級に購入され最終的に消費せられる。他面又、製作品に転化された農産物Bは不生産階級内にてこの場合は年投資として使用されて、本年度の製作品G、G′となる。而してその

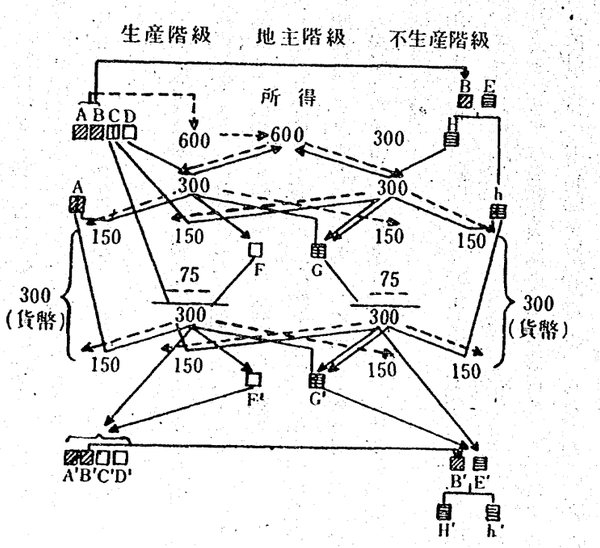
半額E′は次年度にその年投資となり、又地主階級に売却せられることとなる。しからば製作品Eは農産物Bの転形であると同時に製作品E′も農産物Bの転形となる。要之、農産物Bが二回製作品に転化し、地主・不生産両階級にて使用消費せられることとなる。

(5)又不生産階級は前年度末に生産階級から農産物Bを購入して製作品Eをつくり、当該年度の当初に地主階級に売却するとするならば、その年度末に生産階級から農産物B′を購入して製作品E′をつくり、次年度のはじめに地主階級へ売却すると解説せねば、年々同形の支出過程が繰り返えさるることとならないのである。斯く考える時製作品E′は農産物B′の転形として説明すべきではないだろうかと考えられる(本稿第四図参照)。

(6)坂田教授の斯くの如き考え方の適否を別にしてもその表現の方法にも問題があるように思われる。坂田教授は農産物Bの転形した製作品Eが地主階級に売却せらると簡明に解説したので、農産物Bの変形した製作品が不生産階級内の他の成員の手に残る説明が不合理となるのである。原表の説明では製作品は農産物と製作品(農産物の転形)とによりて作られるものとするのであり、坂田教授も、製作品G又G′の場合は農産物Cと農産物Bの変形した製作品とによりて作らるるものとしているのであるから製作品Eがつくらるる時も農産物Bと製作品一単位――これが坂田教授が年投資とする製作品であると考えらるるが――とをもって製作品二単位(筆者はこれを混乱せざるためにHとh――坂田教授はこれも農産物Bの変形とすることから混乱するものと考えられる――)とし、hが不生産階級内にありて、不生産階級の階級内への支出の対象となると思われる。この製作品hと農産物Cとよりつくられる製作品二単位GとG′の内、製作品一単位(農産物Cの転形)は生産階級に売却せられ、他の一単位の製作品E′――直接には製作品hの再製ではあるが、それも農産物の転形に他ならない――は不生産階級の投資として残り、これと農産物B′とによりて、二単位の製作品H′とh′とがつくられ、

第四図

「坂田教授原表解説の修正図」



本年度と同じ様にH′は地主階級に、h′は不生産階級の階級内の使用のために残るものと考えられるのである。

原表のジクザクの末端即ち各年度末に於て、不生産階級には製作品の代金として地主階級から受け取った貨幣の半額と生産階級から受け取った貨幣の半額即ち合計一単位の貨幣額と製作品の一単位E又はE′が残ることとなるが、この製作品Eが坂田教授の説くところではその年投資であり、不生産階級に滞留し、農産物Bを原料として購入するために生産階級に支出せられる貨幣一単位が筆者がその年投資と解するものである。本稿の第四図は坂田教授の解説に従ってその解説図(本稿第三図)を修正したものである。

四

第四、経済表各版の相違に就て

ケネーは経済表初版に於ける如き「四百リーヴルの所得の配分は、余りに社会各員の割り前を少額ならしめ、それは不幸を補はんがために、何等の補力剤を与へることなくして、放血及び断食の処置を行ふ医者に指図せらるるに至った虚脱羸瘦せる王国の最も貧窮なる国民を想起せしむる」が故に「第二版に於ては、凡べてこの人々にその配分を少しく多くせんがために」基本とする地主の所得を六百リーヴルに修正せる旨をミラボオ侯に書き送っている(Economic Journal, vol. V, March, 1895, p. 21)。しかして、この第二版の経済表が前提とする仏蘭西の農業の再建状態は、その初版がその領土約一億二千万アルパンの四分ノ一に当る良地三千万アルパンに大規模耕作地が実施せらるるとせるに第二版に在りては、少なくもその領土の三分ノ一に当る四千万アルパンに大規模耕作の行わるることを前提とし(Tableau Économique., p. vi: 邦訳岩波文庫本二三頁、坂田訳本三〇頁)、初版の経済表は大規模耕作地に使用せらるる馬の犂一挺の三分ノ一を、第二版、第三版の表にてはその二分ノ一をその基準とするものと考えられる。

(一)坂田教授は経済表初版と第二版の異同に就て三階級の支出の基本としての地主階級の純所得が四百リーヴルから六百リーヴルに修正された結果農産物の再生産額は「年投資の回収分」と、その生む百パーセントの「純収穫」との合計八百リーヴルから一千二百リーヴルに訂正された外に経済表には別に考察することとした「投資の利子の回収分」三百リーヴルを計上して一千五百リーヴルとしたことを注意せられる(「訳者解説」二六頁)。この「投資の利子」に就て考察するにミラボオ侯の『経済表と其解説』では各経済表の下の附記に原投資の利子の外に年投資の利子をも夫々一割とし、その回収分を含む農産物再生産額を計算している。第二版の『経済表の説明』にも『経済表の分析』にも原投資の一割の利子のみを計算しているようであるが、その一節に、年投資十億五千万リーヴルの一割の利子を一億一千万リーヴルと計上し(Tableau Économique, p. v: 邦訳岩波文庫本二三頁、坂田訳本三〇頁)又「原投資と年投資との利子」は生産階級自身に回収さるべきものとし、「生産階級の

三十億の回収分のうちにこの階級の原投資と年投資との利子として の十億のあることを観察した」（Œuvres de F. Quesnay., 319—320：邦訳岩波文庫本六三頁—六四頁、坂田訳本一四九—一五〇頁）と記述する。『経済表の分析』に使用される数字の基礎となった『農業哲学』第七章の計算に拠れば農産物「取引の経費七億六千万リーヴルと耕作に用いられる役畜の飼料九億リーヴルを含めて農産物再生産総額は六十三億六千七百二十万リーヴルとなり（Philosophie rurale p. 389. 坂田訳『経済表』九六頁——『経済表の分析』第四考察ではこれを六十三億七千万リーヴルと概算にて記載する——Œuvres de F. Quesnay p. 320. 坂田訳『経済表』一五一頁）、前記取引の経費と役畜の飼料の回収を除く農産物四十九億七百二十万リーヴルを『経済表の分析』では五十億リーヴルと概算にて記述するが、その時の原投資百億リーヴルは『農業哲学』に計算する九十八億四千万リーヴルであり、純収益十九億二千百万リーヴルを年々生む年投資、二十億リーヴルとすれば、原投資はその五倍となる。

故に『経済表の分析』の註に「年投資は耕作の労働のために年々行われる支出から成る。これの投資は耕作の創設の基金を形づくり、年投資の約五倍に当る原投資 Avances primitives から区別されなければならない」（Œuvres., p. 310：邦訳岩波文庫本四七頁、坂田訳本一三四頁）と注意する。而して農産物取引に使用さるるこの「創設の投資」たる原投資二十億を除けば農業そのものに投下せられた投資は七十八億四千万約八十億リーヴルとなり年投資の四倍となり、投資の利子はこの原投資の利子八億と年投資の利子三億との合計十億リーヴルと考えられる。斯くして『農業哲学』の第九章に於ける如く原投資を年投資の四倍とすれば投資の利子を原投資と年投資の夫々の一割とし、原投資を年投資の五倍とすれば原投資の一割を両投資の利子として計上するものと考えられるのである（Philosophie rurale, p. 290：三田学会雑誌第三十八巻第二号七三—八二頁参照）。

㈡坂田教授は経済表の初版と第二版との間にはこれ等「少からぬ異同が眼につくのであるが解説者はそれにもかかわらず、第一版から第二版に至る原表の構想の骨子には根本的な変化がない」（「訳者解説」二八頁）とするも尚、ケネーの手記の初版の原稿と推定せらるる「国民年収入の分配の変化についての注意」に投資六億が年所得四億を、それを印刷せられた初版の訂正と推測される経済表第二版の「シュリ氏王国経済の抜萃」に年投資九億が年所得六億を獲得する（坂田訳『経済表』Les Variations du tableau economique 1. 九頁：Tableau Œconomique by F. Quesnay, p. 3：邦訳岩波文庫本三四頁、坂田訳本四〇頁参照）とするは「農業者の投資が百パーセントの収入を生むという原則がまだ確立されていず、生産階級の年投資と竝んで、不生産階級の年投資にも或る程度の生産性が認められているのではないかとの疑惑を懐かせる」（「訳者解説」二八頁）ものがあるとして「根本的な変化がないと言うのは、……大胆な言い草なのかも知れない」とせられる。

㈢この「注意」に投資を六億「抜萃」に年投資を九億とあるのはその経済表の両側の註に地主階級の所得四百即ち四億、又は六百即ち六億の支出から地主・生産・不生産三階級に於て三家族即ち三百万家族の生活が保証されると同時に、生産階級の経費の半額は人間の労働に支払われる賃銀であるから二百即ち二億又は三百即ち三億は更に農業に雇用せられる労務者の一家又は百万家族の生活を維持せしめるとあることから生じたものであるが、この生産階級に雇用せられる労務者に支払わるるのはその年投資四百又は六百即ち四億又は六億の一部であって、それ以外の費用ではない。この「注意」に投資を六億「抜萃」に年投資を九億とせるは、年投資四億に、投資の利子二億を加算した年支出六億又は年投資六億に、投資の利子三億を加算した年支出九億を不正確な表現から投資又は年投資とせるものか、或いは又、所得の半額の租税を考察の対象として、地主の純所得四億又は六億に、租税二億又は三億を加算した地主階級の所得六億又は九億を年々齎らす生産階級の年投資を六億又は九億とするものとも解せられる。

㈣尚又「抜萃」の註㈠に「租税二億であるとすれば創業の投資の原投資を計算に入れなくても年投資は少なくとも十二億であることが必要」（Tableau Œconomique, p. 3：邦訳岩波文庫本三四頁、坂田訳本四〇頁）であるとするは、ケネー手記の「注意」で地主階級の純所得四億とすれば租税二億を考慮した時年投資を六億とすべきことと比較すれば、第二版の経済表に地主階級の純所得を六百即ち六億と修正すれば租税は当然三億に訂正さるべく第二版の『経済表の説明』に「地主の六億の収入はその他に三億の租税を予想」（Tableau Œconomique., p. v：邦訳岩波文庫本二三頁、坂田訳本三〇頁）している。従ってこの時の租税を含む地主階級の所得九億を与える生産階級の年投資は九億となる。

従って租税を三億に訂正せず二億として、地主階級の所得を純所得六億にこれを加算して八億とし、これを年々生む生産階級の年投資を八億とし、これに「原投資を計算に入れず」只投資の利子を四億のみを加算する年支出は十二億となるが、これを前記の如く「年投資は少なくとも十二億であることが必要」とせるものと考えられる。従って租税を正しく三億と訂正すれば、その時の地主階級の所得は九億となり、斯くてこれを年々生む生産階級の年投資は九億にて、投資の利子をその五倍の原投資の一割とすればその年支出は十三億五千万となるものである。それに十分ノ一税・一億五千を加算して、ミラボオ侯は『経済表と其解説』に、生産階級の年投資十億五千は年々地主階級の所得総額十億五千万を生ずるものとし、その時の年支出を原投資と年投資の利子を含めて十四億八千八百三十三万四千リーヴルと計算している（L'Ami des Hommes., t. vii.

p. 64-68)。

(ロ)ケネー手記の「経済表」に三階級間の点線がその印刷せられた「抜萃」の経済表と異なり、不生産階級からも中央の純収穫へ描かれていることから坂田教授は再生産せらるる純収穫が生産的支出と不生産的支出との双方から結実するかのような疑念を一応持たれたようであるが（「訳者解説」二八頁）この表の点線は鉛筆で書かれており、オンケンがその『経済学史』に複写せる時は明らかにペンにて補筆せるものであって、第二版の「抜萃」の表が生産階級と地主階級の間だけ「その生む純収穫」と記入してこの部分の点線のみ印刷されてあることから、この地主階級と不生産階級との間の鉛筆の点線は不生産階級の支出が純収穫に関係あることを示めすものでなくして各欄の行を正すべく描かれたものと考えられるのである。

(ハ)又生産階級の経費即ち年支出が百パーセント回収せらるる「収穫」を齎らすと言うのと、その年投資が百パーセントの「純収穫」を再生産するというのと混合せられ、「不正確な表現」が用いられている場合が少なくないが、筆者は経済表に在りては年投資の純収益率を百パーセントを前提とするものであり、年支出とは年投資に投資の利子を加算せるもので、再生産総額はこの年支出の百パーセントの回収と年投資の百パーセントの純収穫を加算せるものと考えるものである。従って、いずれにしても、用語の不正確や、点線の有無からして経済表の「生産階級の年投資のみが百パーセントの純収穫を生む」という基本構想を覆すほどの意味に拡張解釈すべきではないとする坂田教授の意見には同感である（「訳者解説」二八―二九頁参照）。

(ヒ)経済表の解説に直接関係するものでないが第二版の『経済表の説明』の生産階級の富の総額を計上する項の邦訳は岩波文庫本に於ても、今回の坂田教授の翻訳に在りても、適当でなく左記の如く訂正せられなければ文章と数字とが一致しないと考えられる。

「年々再生産せらるる収穫二十五億四千三百三十二万二千リーヴルの内、純収穫として十億五千万リーヴルを生産する土地は年利三分三厘余の割合で見積れば、この見地に於て三百三十四億五千五百万リーヴルの富である。これに原投資四十三億三千三百三十四万リーヴルを加算しなければならない。其の合計は三百七十七億八千八百三十四万リーヴルである。更に之に年々の収穫総額二十五億四千三百三十二万二千リーヴルを加算すれば

生産階級の富の総額は経費を含めて……四百三億三千百六十六万リーヴル」（Tableau Œconomique., p. viii：邦訳岩波文庫本二六頁、坂田訳本三三頁参照）。

土地を資本に還算するに年利三分三厘余とするが、これは「三十ドニエに対する一ドニエの割合」sur le pied du dernier 30 即ち

「三十分ノ一の割合」であるが、バウェルの解説では三十パーセントと印刷されている（Economic Journal, vol. v. p. 14）。従って舞出博士もそのまま「三〇%にて資本化したるもの」（山崎教授還暦祝賀記念論文集『経済学研究』一二一頁）とせらるるが、ミラボオ侯の『経済表と其解説』では純収穫十億五千万を年々再生産する土地を正確に三十分ノ一の割合で算出して三百十五億リーヴルの価値と計上している（L'Ami des Hommes., t. vii, p. 68）。

(ヘ)一国の富の計算に就てケネーの第二版の『経済表の説明』とミラボオ侯の『経済表と其解説』とを比較するに、ケネーはこの生産階級の富四百三億三千百六十六万二千リーヴルに不生産階級の富として計算する総額百七十五億二千五百万リーヴル、約百八十億リーヴルを加算して一国の富の総額五百七十八億五千六百六十六万二千リーヴルを約五百九十億リーヴルとし誤差を増減二十分ノ一と仮定して五百五十億乃至六百億リーヴルとする（Tableau Œconomique., p. xi：邦訳岩波文庫本二八頁、坂田訳本三七頁）がミラボオ侯の『経済表と其解説』では生産階級の富の総額を三百八十三億七千百六十七万四千リーヴルと訂正し、これに不生産階級の富として計算する総額百六十五億二千五百万リーヴルを加算した一国の富の総額五百四十八億九千六百六十七万四千リーヴルをケネーの如く増減二十分ノ一を仮定せずして概算して五百五十億リーヴルとする（L'Ami des Hommes., t. vii, p. 68）。この二つの書物に記載される数字を比較表示すれば次表の如くなるのである。

生産階級ノ投資ト収益	ケネー「経済表第二版」	ミラボオ侯「経済表と其解説」
原投資	四、三三三、三四〇、〇〇〇	四、三三三、三四〇、〇〇〇
年投資	一、〇五〇、〇〇〇、〇〇〇	一、〇五〇、〇〇〇、〇〇〇
年支出 投資利子	四三三、三三三、〇〇〇	四三八、三三四、〇〇〇
年支出 利子 原投資利子	三三三、三三三、〇〇〇	三三三、三三四、〇〇〇
年支出 利子 年投資利子	一一〇、〇〇〇、〇〇〇	一〇五、〇〇〇、〇〇〇
年支出	一、四九三、三三三、〇〇〇	一、四八八、三三四、〇〇〇
総収益	二、五四三、三三三、〇〇〇	二、五六八、三三四、〇〇〇
総収益 年支出回収	一、四九三、三三三、〇〇〇	一、四八八、三三四、〇〇〇
総収益 純収益	一、〇五〇、〇〇〇、〇〇〇	一、〇五〇、〇〇〇、〇〇〇
地主所得 純所得	六〇〇、〇〇〇、〇〇〇	六〇〇、〇〇〇、〇〇〇
地主所得 租税	三〇〇、〇〇〇、〇〇〇	三〇〇、〇〇〇、〇〇〇
地主所得総額 十分ノ一税	一五〇、〇〇〇、〇〇〇	一五〇、〇〇〇、〇〇〇

国富ノ計算	「ケネーの経済表の説明」	「ミラボオ侯の経済表と其解説」
生産階級 土地ノ資本価値	三三、四五五、〇〇〇、〇〇〇	三一、五〇〇、〇〇〇、〇〇〇
生産階級 原投資総額	四、三三三、三四〇、〇〇〇	四、三三三、三四〇、〇〇〇
生産階級 再生産総額	二、五四三、三三三、〇〇〇	二、五三八、三三四、〇〇〇
生産階級ノ富	四〇、三三一、六六二、〇〇〇	三八、三七一、六七四、〇〇〇
不生産階級 原投資総額	二、〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇	二、〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇
不生産階級 年投資額	五三五、〇〇〇、〇〇〇	五三五、〇〇〇、〇〇〇
不生産階級 貨幣総額	一、〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇
不生産階級 家屋総額	六、〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇	六、〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇
不生産階級 家財総額	三、〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇	二、〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇
不生産階級 貴金属総額	三、〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇	二、〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇
不生産階級 武器・公共建物	二、〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇	三、〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇
不生産階級ノ富	一七、五三五、〇〇〇、〇〇〇	一六、五三五、〇〇〇、〇〇〇
一国ノ富ノ総額	五七、八五六、六六二、〇〇〇（五五、〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇）乃至（六〇、〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇）	五四、八九六、六七四、〇〇〇（五五、〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇）

月刊 三色旗 六月号

「経済学」の効用……大矢知昇
想都わすれ……守屋謙二
〔随〕ことば……野村兼太郎
無心有言……島田久吉
地主制と部落秩序……小池基之
神武景気の行衛……武村忠雄
——景気観測の仕方——
論理の世界（中）……沢田允茂
人類学の応用……須田昭義
生物と遺伝（一）……水野忠款
ロマン派初期から中期へ……野村光一
——音楽講座(六)——

◇定価一部三〇円・一年三六〇円・書店へ直接御申込下さい。

発行所 東京都高輪局三田豊岡町八 慶応通信
（振替東京一五五四九七番）

書評及び紹介

長守善著

『経済政策の理論』

この書物は経済政策の理論として最も基本的な二つの問題を取り扱っている。その一つは、経済政策の目的すなわち価値判断に関するものであり、他の一つは、経済政策の行われる場としての経済体制の問題である。前者については、第一章　経済理論と経済政策、第二章　経済政策の目的、第三章　厚生経済学という順序で一二〇頁が割かれ、後者については、第四章　経済体制論として残りの約一〇〇頁が割り当てられている。

著者は初めに価値判断の問題に関する在来の見解を概括し、第二章においてこれらの見解をその特徴にしたがって三種に分類される。その一つは、経済政策の目的には倫理的な価値が不可避的にはいりこむことを主張するもの、その二つは、究極の目的にたいする反省を中断して、目的と手段とについての効果関連を問うに止まるもの、その三つは経済という社会現象そのものの中から経済政策の究極目的が確定されうると考えるものである。前の二種の見解にたいして著者は批判的であり、第三の立場をもってみずからの立場とする。第一の倫理主義のそれは、紹介者自身の主張するところである。著者がこれを排する主たる理由は、倫理的な価値の規定が抽象的であって、具体的内容性を持たないということと、この種の価値論は社会哲学の領域に属し、経済政策学の扱うべき領域に属するものではないということである。しかしながらわたくしをしていわしめるならば、抽象的であることは、むしろ価値の当然の性質であって、それを非難するいわれはない。大切な点はそれが形式的な規定で無内容であるかどうかという点に存するのである。たとえば経済性の原則の如く、最小手段、最大満足をもって人間の経済行為の原則とする場合、手段や満足の内容についてなんの規定もなく、したがって、最小といっても最大といっても、ひとびとの任意の決定事項である場合、かかる行為の準則は、形式的であり、無内容であるというにつきる。わたくしが著者の支持するヴィルブラントの立場についてその形式主義を批判するのも、その故である。しかるに倫理的価値の問題については、たとえばイギリス流の功利主義にせよ、ドイツ流の人格主義にせよ、抽象的ではあっても、決して単なる形式主義に止まるものではない。

さらに、著者が批判する第二の論点、すなわち倫理的価値が経済政策学の取り扱うべき領域に属さないという意見は、経済政策学の領域をどう限定するかに依存することである。わたくしの考え方によれば、価値の問題は経済現象に附著しているものであって、切り